「聖なる絵画に描かれた天体」

仏教絵画 ぶっきょうかいが

Buddhist paintings

仏典には須弥山［しゅみせん］という巨大な山を中心とする仏教宇宙観が記述されています。須弥山は宇宙の中心であり、16万由旬［ゆじゅん］（1由旬は約7㎞）の高さで、その山の南にわれわれの住む南贍部洲［なんせんぶしゅう］があるとされています。インドの北にヒマラヤなどの巨大山脈が位置する地形の反映です。

★円通の仏教宇宙モデル

江戸時代の半ば、西洋天文学が輸入されて地動説や地球球体説が伝えられると、仏教が説いてきた旧来の天文モデルに懐疑的な目が向けられるようになりました。それに対抗して仏教天文学の正当性を主張したのが円通［えんつう］です。円通は仏教護持のため、経典の説を絵画化しました。

★仏画の図像と尊名の誤り

古来、北辰と北斗七星は死を司り、運命を決定する星であるとして信仰され、妙見菩薩［みょうけんぼさつ］像として視覚化されています。一方、近世になると九曜の図像と名称に混乱が生じます。典拠の『仏像図彙』の誤りが原因で、後に修正されました。誤りは関連書籍でご確認ください。

● 仏教絵画の中の天体

須弥山図　円通　江戸時代　紙本木版
（個人蔵）

仏教が古くから伝える宇宙観を図解したものです。世界の中心には、大海から須弥山と呼ばれる巨大な山が聳えていると各種の仏典は伝えています。大地は風輪、水輪、金輪、地輪からなり、外縁は山脈で、その内部は大海です。

須弥山の頂上には帝釈天の居所があり、この山の四方には島があって、そのうちの南方にある南贍部洲という島が、我々の居住世界と説かれています。

この山の中腹の周りを太陽と月が巡り、太陽に照らされた部分が昼、影の部分が夜であることを、日月の軌道すなわち二重の円で示しています。

妙見菩薩像ならびに九曜図
江戸時代　絹本著色　（個人蔵）

北極星と同体とみなされる妙見菩薩像を中心に描き、周囲に九曜を配しています。

妙見菩薩は北極星を神格化したものとされ、また、信仰の対象には北斗七星も含まれてきました。本図では、周囲に三十番神（一ヶ月30日の守護神）を墨書し、上下に北斗七星と九曜を配しています。

「鑑賞絵画に描かれた天体」

世俗絵画　せぞくかいが

Secular paintings

江戸時代になると非宗教絵画が発達するようになります。世俗的な各種の鑑賞絵画が制作され、太陽や月などの天体モチーフも描かれました。太陽は真っ赤な円相として、また、月は群雲・樹木・花鳥と組み合わせて抒情性を作り出すなどし、イメージの固定化・形式化が多く見られます。ここでは個性的な作品を二点紹介します。

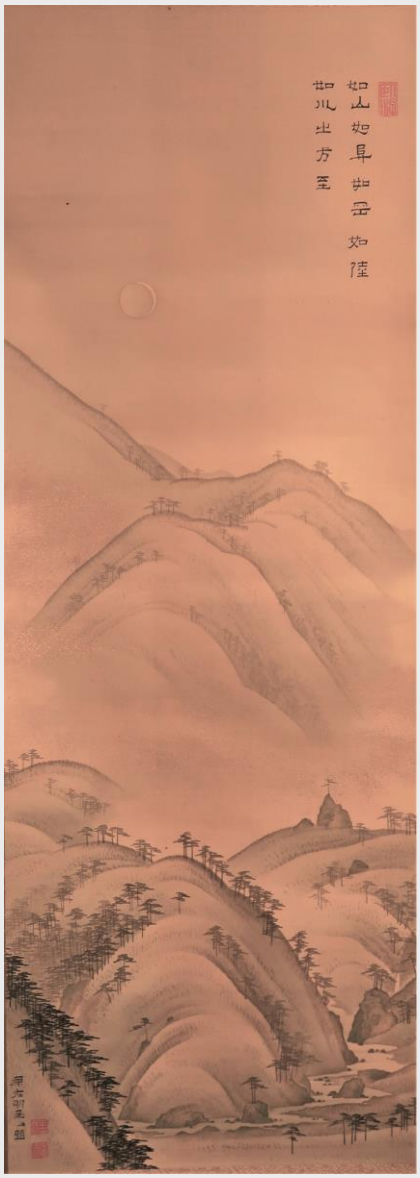
★天保九如図

天保九如図は『詩経』に基づく画題。天保（天子の位）を「……の如く」という九つの自然の情景に譬えて天子の長寿と天下の平和を寿ぐものです。通常、天空には太陽と月を二つ描き分けますが、京都の画家原在明はそれらを一つのものとして描き、日食のような表現になっています。

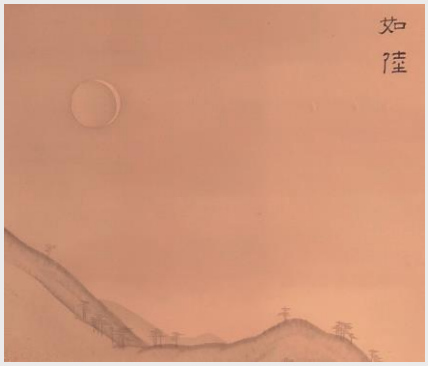
★二見ヶ浦図

二見ヶ浦は三重県伊勢市の景勝地。東端の夫婦岩は日の出の景色で有名です。夏至の頃には夫婦岩の間の富士山から昇る朝日を見ることができます。浮世絵師の窪俊満は旧暦十月の日の出を誇張して描きました。自賛のほか、寄合書の賛には狂歌師として著名な蜀山人の名も見えます。

●世俗絵画（鑑賞絵画）に描かれた天体



天保九如図　原在明筆　江戸時代
（個人蔵）



二見ヶ浦図　窪俊満筆並賛　江戸時代
（個人蔵）

窪俊満（1757-1820）は江戸時代後期の江戸の浮世絵師。狂歌師としても著名。

原在明（1778-1844）は江戸時代後期の京都の画家。父は原派の祖・原在中。